

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～

会期	平成30年6月9日（土）～平成30年8月12日（日）
休館日	毎週水曜日（祝日の場合は翌日休館）
開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料	[個人] 大人 600円 小・中学生 300円 [団体]（20名以上） 大人 540円 小・中学生 250円
ギャラリートーク	日時：平成30年6月9日（土） 午前の部 午前10時～ 午後の部 午後2時～ 講師：藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館担当課長）
主な展示所蔵品	■川村清雄「ヴェニス風景」 ■酒井抱一「干鮭図画賛」 ■斎藤五百枝「雲の山」 ■尾形光琳「遊亀図」 ■狩野常信「鳥獣図屏風」 ■狩野周信「秋草流水図屏風」 ■源氏物語絵色紙形 ※展示品については展示出陳リストを参照ください。

主 催/ 新発田市 協 力/ 早稲田大学図書館
お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

<平成30年度第1回市島邸企画展>

“アートギャラリー” 市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～

江戸時代から千町歩地主として栄えた市島家には、全国から多くの人を訪れ、さまざまな文物が寄せられてきました。書跡や絵画、図書、それぞれの資料は、時に宗家、分家それぞれの市島家と作者との交流から、また時には各家歴代の人びとが、みずから集めた貴重な品々です。

今回は市島邸にのこるさまざまな資料の中から、いろいろな絵画作品をご紹介します。古くは江戸時代、幕府御用絵師として活躍した狩野常信、周信父子それぞれの屏風絵や江戸琳派の中心である酒井抱一の画幅、近代の作品では市島春城をして「洋画界の大家」と言わしめた近代絵画の巨匠・川村清雄の大作、さらには挿絵画家として著名な斎藤五百枝の作品など、作者も時代も多岐にわたるその内容は、そのまま市島家の歴史と文化を象徴しているとも言えましょう。

今回ご紹介する作品の多くがこれまで邸内に秘蔵されていたものです。なかには市島邸にもたらされた細かい経緯が謎に包まれているものも多く、今後さらなる調査研究が必要ではありますが、まずは一人でも多くの皆さんにこれらの作品の存在を知っていただきたいと考えて企画展示を開催することといたしました。

展示室はもちろん、邸内にもさまざまな絵画を展示しました。アートギャラリー＝美術館＝としての市島邸をどうぞごゆっくりお楽しみください。

平成30年6月

市島邸

平成30年度第1回市島邸企画展示

「アートギャラリー」市島邸」出陳リスト

	作品名 点数	作者 材質 年代 等
1	春景魚艇図 1軸	劉度画 絹本著色
2	遊亀図 1軸	尾形光琳(1658-1716)画 紙本淡彩
3	鳥獸図屏風 六曲半双	狩野常信(1636-1713)画 紙本淡彩
4	秋草流水図屏風 八曲一双	狩野周信(1660-1728)画 紙本著色 付・極書(狩野養信、1828年<文政11>)
5	草花図短冊貼込屏風 六曲一隻	酒井抱一(1761-1829)画 絹本著色
6	干鮭図画賛 1軸	酒井抱一画賛 紙本淡彩
7	菊図 1軸	酒井抱一画 絹本著色
8	梅花百合図 1軸	酒井抱一画 絹本著色
9	孔雀図屏風 二曲一隻	渡辺南岳(1767-1813)画 紙本淡彩
10	太宰府天満宮画賛 1軸	仙厓(1750-1837)画賛 絹本墨画
11	秋江清眺之図画賛 1軸	渡辺華山(1793-1841)画 佐久間象山(1811-1864)賛 紙本墨画
12	源氏物語絵色紙形 49枚	絹本著色
13	雀図襖絵 2面	品川篁圃画 絹本淡彩 1893年(明治26)
14	深山松鶴図 1軸	橋本雅邦(1835-1908)画 絹本著色
15	秋景山家図 1軸	川合玉堂(1873-1957)画 絹本著色
16	ヴェニス風景 1額	川村清雄(1852-1934)画 キャンバス・油彩
17	楊柳観音画賛 1軸	大谷光演(1875-1943)画賛 絹本淡彩
18	曇の山 1額	斎藤五百枝(1881-1966)画 キャンバス・油彩 1908年(明治41)
	<参考>軍鶏 『少年倶楽部』第17巻第7号表紙	斎藤五百枝画 大日本雄弁会講談社 1930年(昭和6) 個人蔵
	<参考>輝く金鶏勲章 『少年倶楽部』第20巻第5号表紙	斎藤五百枝画 大日本雄弁会講談社 1933年(昭和8) 個人蔵
	<参考>桃太郎 (新・講談社の絵本3)	斎藤五百枝画 千葉幹夫文・構成 講談社 2001年(平成13) 個人蔵
	<参考>斎藤五百枝装訂作品	吉川英治著『少年少女小説 月笛日笛』(続とも)(東光出版社、1947、48年) 吉川英治著『竜虎八天狗』上巻(ポプラ社、1948年) 土師清二『少年少女小説 白刃乱舞』(内田書店、1948年) 佐藤紅緑『少年讃歌』(妙義出版社、1947年) 佐藤紅緑『あゝ玉杯に花うけて』(尚文館、1948年) 子母澤寛『風雲白馬岳』(妙義出版社、1948年) いずれも個人蔵
19	清流漁楽之図 1軸	磯部草丘(1897-1967)画 絹本著色
20	薔薇図 1額	キャンバス・油彩
21	大黒天図 1軸	紙本墨画 付・大黒天由来記(1962年<昭和37>)
22	茶室(水月庵) 1額	アンヘル・ポペーダ(1954-)画 キャンバス・油彩

平成30年度第1回市島邸企画展示
「“アートギャラリー”市島邸」出陳リスト

関連資料

平山堂評価元簿 1綴	1916年(大正5)6月3日
書画骨董明細書 1綴	市島徳厚→新発田税務署 1947年(昭和22)10月29日 ※「市嶋家近代文書」(新潟県立文書館所蔵)
書画骨董貴金属宝石類報告書 1綴	市島徳厚→新発田税務署長 1946年(昭和21)10月18日 ※「市嶋家近代文書」(新潟県立文書館所蔵)
書画掛軸記 1冊	カーボン複写 [1964年(昭和39)] ※「市嶋家近代文書」(新潟県立文書館所蔵)
書画寸法調 1綴	カーボン複写、1964年(昭和39) ※「市嶋家近代文書」(新潟県立文書館所蔵)
書画明細書 1綴	市島徳厚 ※「市嶋家近代文書」(新潟県立文書館所蔵)
<参考>市島春城「双魚堂日載 五一」	1916年(大正5)5月 パネル(原本:早稲田大学図書館所蔵。古典籍総合データベースより)

● リストはおおむね作者の生年順とした。

● 展示にあたっては、以下の資料を参照した。

『国史大辞典』、『日本人名大辞典』、(いずれもジャパンナレッジ版)、
『日展史』1<文展編1>(日展、1980年)、沢田章『日本画家辞典』落款編(3版、大学堂書店、1974年)、
丹尾安典「心華雑録」1(『一寸』52、2012年)、王伯敏『中国絵画史事典』(雄山閣出版、1996年)、
『中国画家人名大辞典』(台湾東方書店、1959年)、
弥生美術館編刊『斎藤五百枝展 熱血少年小説のさし絵画家 解説書』(1997年)

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～

市島邸所蔵の絵画



市島邸が所蔵する書画・骨董類については、2008年に新発田市が市島邸を管理するようになると、その翌年以降に悉皆調査がおこなわれ全点のリストが作成された。リストからは現在100点ほどの絵画資料が収蔵されていることがわかるが、これらのすべてが江戸、明治のむかしから市島家が収集し、保管してきたものではない。なかには「財団法人 継志会」が市島邸の管理をするようになってから購入したり、関係者が持ち込んだものもあり、必ずしも「千町歩地主 市島家」の歴史と文化を伝えるものではないことを最初にお断りしなくてはならない。

実は所蔵する書画類の調査がおこなわれたのは上記だけではなく、近代以降少なくとも2回おこなわれている。

第1回が1916年（大正5）におこなわれた調査で、その時の記録が市島邸に残っている。これは宗家の依頼を受けた市島春城が東京の骨董商である平山堂を使って実施したもので、天王の本邸と鶴見別邸での調査に同行した春城の日記、筆録にも調査の概要とその後の対応について記されている。

第2回調査は、戦後1947年（昭和22）に当主・市島徳厚によりおこなわれたものである。これは財産税申告用として新発田税務署に提出されており、戦後の農地改革政策の一環として行われた財閥、豪農らの資産整理が進められるなかで実施されたことがわかる。その後、市島宗家にのこされた品々は、徳厚と市島家の事務所閉鎖に伴う残務整理にあたった職員らによって大切に管理されていたが、徳厚没後に管理を継承した継志会（市島成一理事長）によって現状変更（売却等を含む）が進められ、あらたに購入したもの、寄贈されたものを加え、今日の姿となったと考えられる。

このような経緯を経、現在所蔵されている書画のうち、かつての「千町歩地主 市島家」の所蔵品と呼べるものは少なくなってしまう。まことに残念ではあるが、これからは現在所蔵している作品の調査を進め、その適切な活用を考えてゆくことが重要であろう。個々の来歴を再確認し、本来市島邸にあった作品を中心に展覧に供してゆくこととしたい。

市島邸では、ここ「市島邸」が、江戸時代から千町歩地主として当地に栄え、地域住民とともにあった市島宗家の本邸であった、その事実を強く意識し、将来に継承してゆく努力を続けてゆきたいと考えている。

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



1. 春景魚艇図 1軸 劉度画 絹本著色

劉度（淑憲）は中国・銭塘（浙江省杭州）の生まれで、明末～清初頃に活躍した画家。同郷の藍瑛（1585－1664?）に学び、のちに題辭に「仿趙承旨画法 劉度」とあるように、趙承旨（趙伯駒、宋代の画家）の画法も取り入れ、山水画をよくした。蓋裏に「孤村三信謹記」とあることから、箱書（「劉淑憲仿趙承旨春景漁艇図」）は酒井抱一の弟子で越後出身の池田孤村（三信、1801-1866）の手になるかとも見えるが、真贋は未詳である。



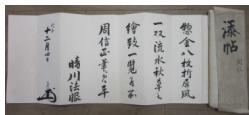
2. 遊亀図 1軸 尾形光琳（1658－1716）画 紙本淡彩

尾形光琳（1658－1716）は京都の裕福な呉服商の家に生まれ、狩野派の山本素軒に学び、俵屋宗達に傾倒、装飾性に富んだ作品を制作、のちに「琳派」と呼ばれる画風を確立した。平山堂の調査リスト（1917年）に光琳の作品は「千鳥 横物」が掲載されているが、今日それに相当するものは残っておらず、本作品にも「法橋光琳」の落款が見えるが、その真贋や来歴は未詳。



3. 鳥獸図屏風 六曲半双 狩野常信（1636－1713）画 紙本淡彩

本来は鶴、獅子、虎、猿などを描いた半双とともに一双の鳥獸図屏風であったが、新潟県北部地震（1995年）で被災し、現在は展示した半双のみが残されている。狩野常信（養朴、1636－1713）は木挽町狩野家の初代・尚信の子として生まれた。父の没後、その後を継ぎ、御所の造営時にたびたび障壁画を担当、また朝鮮国王に贈る屏風を制作するなど、幕府の奥絵師として活躍した。古画の研究にも意欲的で、その編著『常信縮図』は、絵画史上重要な資料となっている。1947年（昭和22）徳厚提出リスト掲載資料。



4. 秋草流水図屏風 八曲一双 狩野周信（1660－1728）画 紙本著色 付・極書（狩野養信、1828年<文政11>）

狩野周信（如川、1660－1728）は江戸時代前半の絵師。幕府の御用絵師としてもっとも格式の高い奥絵師で、狩野探幽の弟である尚信にはじまる木挽町狩野家の3代目として活躍した。また戊子（文政11＝1828年）12月4日付の極書（鑑定書）を書いた狩野養信（晴川、1796－1846）は木挽町狩野家9代目にあたり、幕末の江戸城本丸御殿障壁画制作を指揮したことで知られる。画面中央に萩や小菊といった秋の草花を配し、図案化した流水を描いた八曲一双の屏風である。1947年（昭和22）徳厚提出リスト掲載資料。



5. 草花図短冊貼込屏風 六曲一双 酒井抱一（1761－1829）画 絹本著色

酒井抱一（1761－1829）は姫路藩主・酒井忠仰の次男として江戸で生まれ、早くから俳諧、狂歌などの学芸にその才を発揮した。37歳で出家した後は、書画などにも親しむ生活を送り、特に尾形光琳に私淑、その画風に一層の洒脱さを加えたあらたな手法を確立したことから、江戸琳派の創始者とも言われる。本屏風は市島徳厚夫人である市島信が所蔵していたもので、その後市島邸に寄せられたもの。

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～

 <p>6. 干鮭図画賛 1軸 酒井抱一画賛 紙本淡彩</p>	<p>1917年調査（平山堂）の際に既に市島邸で所蔵していたことがあきらかな数少ない資料で、なかでも春城たちはこの画を比較的「良品」の一つとしている。鮭の寒風干しは越後の名物、冬の風物詩といえるが、その姿をありのままに描いたもので、添えられた句から年末の情景がリアルに浮かび上がってくる。抱一の弟子の池田孤村（1801-1866）が越後出身であることから、あるいは孤村から贈られた鮭を描いたものかとも推測される。</p> <p style="text-align: center;">塩魚に正月ちかき日さしかな</p>
 <p>7. 菊図 1軸 酒井抱一画 絹本著色</p>	<p>干鮭図と同じく平山堂リストに載せられている抱一の作品。リストではあわせて展示した梅花百合図と二幅対とされ（「木、菊画」「草花、梅画」とある）、表具も揃っている。</p>
 <p>8. 梅花百合図 1軸 酒井抱一画 絹本著色</p>	<p>平山堂リストで菊図と対幅とされるもの。所蔵の抱一画とされるものの中でもひとときわ鮮やかな作品である。</p>
 <p>9. 孔雀図屏風 二曲一隻 渡辺南岳（1767-1813）紙本淡色</p>	<p>渡辺南岳（巖、1767-1813）は円山応挙門下の画家で美人画を得意とし、江戸で酒井抱一、谷文晁らとも交わった。孔雀は、極彩色の羽を鮮やかに広げた姿で描かれることもあるが、本作品では羽を閉じた姿をほぼ墨一色で羽根の一枚一枚まで微細に描いている。1947年（昭和22）の徳厚作成リストに掲載されている作品の一つ。</p>
 <p>10. 大宰府天満宮画賛 1軸 仙厓（1750-1837）画賛 絹本著色</p>	<p>江戸時代後期の禅僧であり、軽妙洒脱な画風で知られる画家でもある仙厓（義梵、1750-1837）の落款をもつ墨画。仙厓は美濃の農家に生まれ、11歳で仏門に入り、のち博多の聖福寺の住職となり、人々の教化につとめた。その過程で描いたユーモアに富んだ禅画は、現代においても高く評価されている。</p> <p style="text-align: center;">宰府天満宮 千早振三笠の山の梅か香に 幾世の神の天降りけむ</p> <p style="text-align: center;">井 厓「仙厓」（朱文楕円印）</p>

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



1 1. 秋江清眺之図画賛 1軸 渡辺崋山 (1793-1841) 画
佐久間象山 (1811-1864) 賛 紙本墨画

落款から崋山画、象山賛とされるが、真贋のほどは未詳である。渡辺崋山 (1793-1841) は江戸時代後期の画家、蘭学者。三河国田原藩士の子として生まれた崋山と市島家の接点は知られていない。一方信濃国松代藩士であった佐久間象山 (1811-1864) は、藩の用務で角市・市島家を訪れたことがあり、その際、角市家2代次郎吉 (岱海) の著述に跋文を寄せるなど、市島家と無縁ではなかった。

顧跡雖羈跼塵累幸無

嬰林居宜隱論高樹与雲

平夏書東窓臥眼醒

非夢驚坐閱釈氏書

亦愜静寂情雨余夕

風度露葉弄新晴於

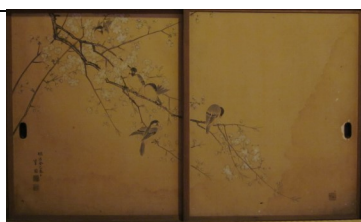
焉息認祿超然耳無生

象山「啓又大星」(白文方印)



1 2. 源氏物語絵色紙 49枚 絹本著色

南山亭仏間に通じる部屋の襖に貼り込まれた奈良絵風の色紙形源氏絵。源氏物語各段の名場面を選んで描いたもので作者年代とも未詳。市島邸が完成した1877年(明治10)頃にあわせて制作されたものであれば、幕末から明治初年頃の作ということになる。本来は源氏54帖にあわせて描かれたと思われるが、現在49枚が残っている。



1 3. 雀図襖絵 2面 品川篁圃画 絹本淡彩 1893年(明治26)

落款(明治癸巳=明治26年)から市島邸竣工当時(1877=明治10年)には無かったことがわかる。作者の品川篁圃について詳しいことは不明だが、北海道の教育者、永久保秀二郎の1911年(明治44)12月の日記に函館在住の人物として「品川篁圃」の名がみえる。



1 4. 深山松鶴図 1軸
橋本雅邦 (1835-1908) 画 絹本著色

橋本雅邦 (1835-1908) は、川越藩御用絵師の子として江戸に生まれ、木挽町狩野家狩野雅信(勝川、1823-1880)に学び、同門の狩野芳崖(1828-1888)とともに明治の日本画壇を支える存在となった。東京美術学校開校とともに同校教授となり後進の指導にも力を注ぎ、横山大観、下村観山、川合玉堂など、近代の日本画壇を担う人材を育成した。別に展示した「書画明細書」(市島徳厚編、1947年頃)に「松上之鶴」とあるのが本作品と思われ、遅くともその頃までに市島家の所蔵となっていたことがわかる。

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



15. 秋景山家図 1軸 川合玉堂 (1873-1957) 画 絹本著色

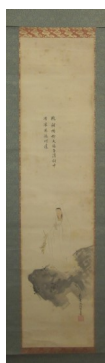
川合玉堂 (1873-1957) は愛知県に生まれ、日本画を橋本雅邦らに学び、1915年 (大正4) からは東京美術学校教授として後進の指導にもあたった。四条派と狩野派を融合させたと言われた画風で日本の自然を情趣豊かに描き高く評価され、1940年 (昭和15)、文化勲章受章した。



16. ヴェニス風景 1額
川村清雄 (1852-1934) 画 キャンバス・油彩

川村清雄 (1852-1934) は江戸に生まれ、幕府の洋学研究機関である開成所で川上冬崖 (1827-1881) に洋画を学んだ。明治維新後フランス、さらにはイタリアに赴き、帰国後しばらくしてから画塾を開き後身の育成にあたりつつ画業に勤しんだ。本作品の存在はリスト上では確認されていたが、2014年に早稲田大学の調査によりあらためてその存在がクローズアップされたものである。本作品が市島家にもたらされた経緯については、

ながたか
清雄祖父 (川村修就、1795-1878) が初代新潟奉行であった点も考慮してよいかもかもしれないが、より大きな接点として市島春城の存在が考えられる。春城は早稲田大学恩賜館 (1911年竣工、1945年戦災により消失) を飾る絵を川村に依頼しており、その過程で自身も一点入手している。本作品はそれとは別に春城を通じて市島宗家にもたらされたものかもしれない。川村は本作品と同様の構図からなるヴェニス風景を複数描いており、それらは現在、東京国立博物館や早稲田大学 (寄託) に所蔵されている。



17. 楊柳観音画賛 1軸 大谷光演 (1875-1943) 画賛 絹本淡彩

東本願寺第23代法主にして真宗大谷派の管長をつとめた大谷光演 (彰如、1875-1943) は、句仏の号を持つ俳人として、また竹内栖鳳らの教えを受けた画家としても有名であった。柳の枝を手にした観音像は薬王観音とも呼ばれ、仏画の画題としてしばしば取り上げられた。市島家の菩提寺である五十公野の浄念寺は真宗大谷派であり、その関連からか大谷派を中心とした真宗の僧侶らの書画が市島家に数点遺されている。

瓶裡楊柳大悲無涯冠中

仏像恩徳何遺

彰如薫沐拜写并賛「釈光演印」 (白文方印)



18. 曇の山 1額 斎藤五百枝 (1881-1966) 画
キャンバス・油彩 1908年 (明治41)

斎藤五百枝 (1881-1966) は『少年倶楽部』や『講談社の絵本』など、大正から戦後にかけて活躍した挿絵画家として知られているが、その画業は中学卒業後に黒田清輝らが設立した白馬会で洋画を学び、さらに東京美術学校で岡田三郎助の教えを受けるところからはじまった。「曇の山」は、1908年 (明治41) 3月に東京美術学校を卒業した五百枝が、同年10月の第2回文部省美術展覧会 (第2回文展) に出品したものである。五百枝の作品は、挿絵原画も含めて戦災で失われたものが多く、特に油彩画は白馬会時代からいくつもの作品を描いていることが記録からうかがえるが、今日ではほとんど遺っていない。本作品はこれまで「山の図」として市島邸に保管されてきたが、今回の展示にあたり新たに調査をおこない確認できたもので、五百枝の油彩画の今日遺された数少ない貴重なものと言える。

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



18. <参考>軍鶏

『少年倶楽部』第17巻第6号表紙

1914年（大正3）11月の創刊号を担当して以来、五百枝は『少年倶楽部』の表紙画をたびたび描いている。また連載小説の挿絵を任されることも多く、本号掲載の大佛次郎「山嶽党奇談」の挿絵も五百枝の手になるものである。

個人蔵



18. <参考>輝く金鶏勲章

『少年倶楽部』第20巻第5号表紙

個人蔵



18. <参考>桃太郎（新・講談社の絵本3）

斎藤五百枝画 千葉幹夫文・構成 講談社 2001年

1937年の作品を「21世紀に残したい幻の名作絵本」の1冊としてあらたに刊行したもの。本書の初版をはじめとした「講談社の絵本」シリーズは、全ページがカラー印刷、画家も作家も一流の面々を揃えた画期的な叢書であった。本書によって「若武者姿の桃太郎のイメージは完全に定着した」（本書解説）とされ、多くの人々の思い描く「桃太郎」は、五百枝のこの作品から始まったとも言えよう。



18. <参考>斎藤五百枝装訂作品

吉川英治著『少年少女小説 月笛日笛』（続とも）

（東光出版社、1947、48年）

吉川英治著『竜虎八天狗』上巻（ポプラ社、1948年）

土師清二『少年少女小説 白刃乱舞』（内田書店、1948）

佐藤紅緑『少年讃歌』（内田書店、1948）

佐藤紅緑『あゝ玉杯に花うけて』（尚文館、1948）

子母澤寛『風雲白馬岳』（妙義出版社、1948）

いずれも個人蔵

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



19. 清流漁楽之図 1軸

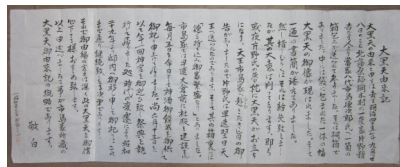
磯部草丘（1897－1967）画 絹本著色

磯部草丘（1897－1967）は群馬県に生まれ、のち川合玉堂に学び1924年（大正13）には帝展に初入選、その後は連続して出品するようになった。1943年（昭和18）応召し、台湾で敗戦を迎え、戦後は郷里で制作を続けた。市島邸との関係は、来邸の有無も含めて未詳。



20. 薔薇図 1額 キャンバス・油彩

作者、来歴ともに未詳だが、キャンパス裏に「昭和二十八年」かと思われる書入れがあり、その頃に市島家にもたらされた可能性がある。市島家の東京別邸に飾られていたもので、宗家9代・徳厚の夫人である市島信より市島邸に贈られたもの。



21. 大黒天図 1軸

紙本墨画 付・大黒天由来記（1962年<昭和37>）

ともに伝わった由来記によれば、本作品は1912年（明治45）9月、北蒲原郡綱木村に住む片野類吉という人物から市島宗家8代・徳次郎（湖月）に贈られたものだという。片野氏の夢枕に大黒天が立ち天王市島家に赴きたいと言ったので急ぎ市島家に届けたとのことで、元箱には「徳を持ち込み御家繁盛なり」とあったという。市島家ではその後邸内に社を設けて祀っていた。



22. 茶室（水月庵） 1額

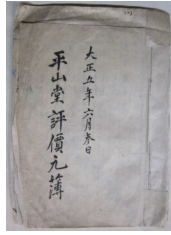
アンヘル・ポペーダ（1954－）画

アンヘル・ポペーダ（Poveda, Angel B、1954－）は、スペインに生まれ、同国サマランカ美術学院で油絵などを学び、1981年来日、上野の森美術館「日本の自然を描く」展等に出品している。溢れる緑と陽光の中に市島邸水月庵を描いた本作品は、その画題から当家にもたらされたものと思われる。

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



<関連資料> 平山堂評価元簿 1綴 1916年(大正5)6月3日

宗家の依頼によって市島春城(謙吉、1860-1944)が東京の骨董商、平山堂伊藤平蔵におこなわせた市島邸所蔵品評価の記録。春城によれば、天王本邸約300点、鶴見別邸約100点、合計400点ほどの書画、茶器等が評価の対象となったという。酒井抱一、谷文晁、尾形光琳らの画、藤原定家、松尾芭蕉、良寛らの筆跡や画賛など、錚々たる名家の作品とされるものが所蔵されていたことがわかるが、評価の結果はあまり芳しいものではなかった。



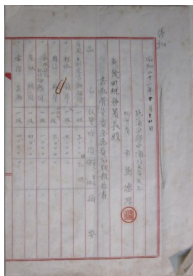
<関連資料> 書画骨董明細書 1綴

市島徳厚→新発田税務署長

1947年(昭和22)10月29日

冒頭に1959年(昭和34)に市島家事務所が作成した「書画骨董の現況」と題する一文が添えられており、そこからこの明細書が1947年に財産税申告のために作成され、市島徳厚が新発田税務署に提出したものだと思われる。リストに記入された朱書入から、1959年段階ですでに売却されたものも多くあったことが明らかだが、「天王に現有」しているものも確認できる。ただ、そのうち現在所蔵されているものは少ない。

市嶋家近代文書(新潟県立文書館所蔵)



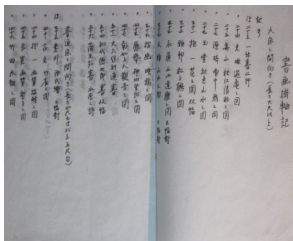
<関連資料> 書画骨董貴金属宝石類報告書 1綴

市島徳厚→新発田税務署長

1946年(昭和21)10月18日

GHQ(連合国最高司令官総司令部)による農地改革政策は占領直後から進められたが、本報告もその一環として提出したものと思われる。末尾に「終戦後売却又ハ贈与シタルモノナシ」との一文が添えられているが、これらの資料のうち、今日まで市島家に残っているものはほとんどない。

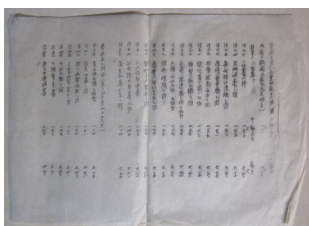
市嶋家近代文書(新潟県立文書館所蔵)



<関連資料> 書画掛軸記 1冊
カーボン複写[1964年(昭和39)]

市島邸所蔵の書画を、大きさ別に「大床之間向き(長さ六尺以上)」「普通床之間向き(長さ四尺七寸以上五尺台)」「茶掛け向き(長さ四尺一寸五分以下)」にわけてリスト化したもの。これと同内容の「書画寸法調」と題する資料が同じく市嶋家近代文書に含まれており、そこには「昭和三十九年九月虫干しの節調」とあることから、本資料も同時期に作成されたと考えられるが、現在ではすでに失われた品々も多く含まれている。

市嶋家近代文書(新潟県立文書館所蔵)



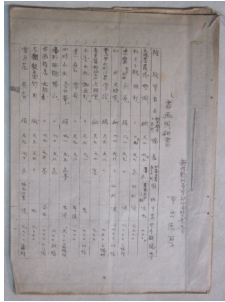
<関連資料> 書画寸法調 1綴
カーボン複写[1964年(昭和39)]

市嶋家近代文書(新潟県立文書館所蔵)

2018年度第1回 市島邸企画展示

“アートギャラリー”市島邸

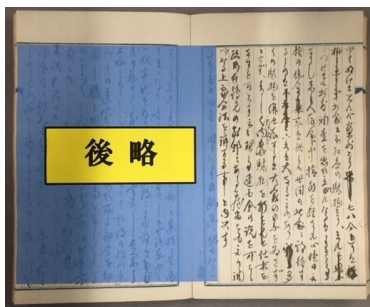
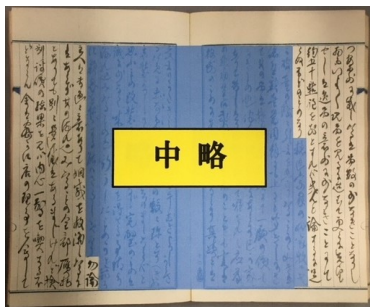
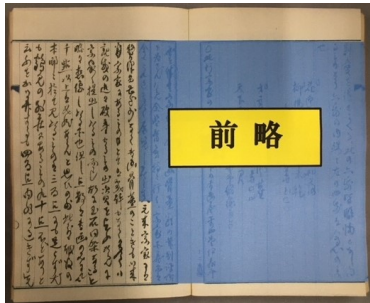
～市島邸所蔵絵画の名品から～



<関連資料> 書画明細書 1綴り

市島家が所蔵していた書画、骨董の一覧表。書画部分については、別に展示した「書画骨董明細書」（市島徳厚→新発田税務署）と内容を同じくするところから、同時期、すなわち1947年頃に作成されたものと思われる。

市嶋家近代文書（新潟県立文書館所蔵）



<参考> 市島春城「双魚堂日載 五一」
1916年（大正5）5月 パネル

元来宗家には贅沢品甚だ少なく、書画骨董のときも以来宗家にあるものとは幾許もなく、多くハ親戚の追々破産せるもの出資を乞ふために宗家へ提出したるもの而已、故に玉石同架なること略々想像したる所也、但し点数は書画のみにて千点以上は必然あらんと思ひの外、此度越後の本邸ニ於て見たるものは三百点にも足らず尤も鶴見の別荘にあるもの九十点ほどありと云ふを加算するも四百点内外に過ぎず、先づ案外に感したるは品数の少なきことなりし、扱而いよいよ現品を見るに迫むて更らに失望せしは逸品の意外に少なきことにて、約五十点程を別とすれば幾んど論するに足らぬほどのものなり、

（中略）

勿論主人は書画に意ありて姻戚を救済したるにはあらず、其の流れ込みたるもの全部贖物とありても別ニ遺憾はあるまじけれど、検別評価の結果を見バ内心一驚を喫するほどならん、余は密かに店の理事を会して曰く、明けて見れば案外なり、七八分通りは此家に不相応の駄物なり、それ二つけても此度調査を思ひ立たれたるはよき事なりし、老主人存命中検別を経されバ他日取捨の機会或は無らん、世間の此家ニ期待するものは実は大なるものあり、多くの駄物を併せ存するは大家の累を為さずとせず、よろしく折を見て内密駄物を仕末をなすを可とす云々、理事連も余の説を可とし、結局鶴見の別邸ニある蔵品とも取り調べたる上、処分法を講ずる事と内決す、

早稲田大学図書館所蔵（古典籍総合データベースより）

平成30年度 第1回市島邸企画展

“アートギャラリー” 市島邸

～市島邸所蔵絵画の名品から～



川村清雄「ヴェニス風景」

■会期:平成30年6月9日(土)～8月12日(日) **6月9日(土)入館無料**

■作品解説会:平成30年6月9日(土) 午前10時～ / 午後2時～

■講師:藤原 秀之 氏(早稲田大学戸山図書館担当課長)

■会場:市島邸(新発田市天王1563) ☎0254-32-2555

■時間:午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館:毎週水曜日(祝日の場合は翌日休館)

■入館料:大人600円、団体(20名以上)540円、小中学生300円、団体250円



酒井抱一「干鮭図画賛」

主催 / 新発田市 協力 / 早稲田大学図書館
お問い合わせ / 新発田市観光振興課 ☎ 0254-28-9960